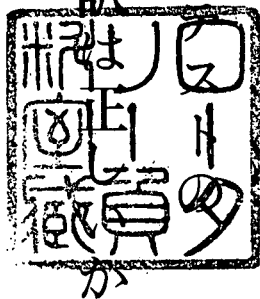


フ
オ
ア
ウ
エ
イ
・

日
本
語
訳



R I 第三六六地区PDG

大阪RC 塚 本 義 隆

366 地
カバト 新 殿寄贈

02

4066

ロータリー資料室

まえがき

このごろの日本は何処かが狂っているようです。最近十余年間、日本人は暴走をつづけました。その結果の脱線、混乱だと思えます。

もし日本の諸企業のトップに立つ六万人のロータリアンが、フォアウエイ・テストを知り、本当に心に銘じて、その線に沿い実践してきたならば、今日の混乱（環境、資源、インフレ、不道德など）は起らず、仮りに起きたとしても軽症であり得たと考えるのですが、いかがでしょうか。

現在の世相とフォアウエイ・テストとは無関係ではありません。否、今日ほど切実にこのテストの意図と文字についてロータリアン諸君に関心を持ってほしい時はないのです。一小文を書いた所以であります。

一九七四年一月

RI第三六六地区
職業奉仕委員長

塚 本 義 隆

〔目 次〕

1	大阪へ来た原作者テラー	一
2	もしテストが実践されていたら	二
3	標語やスローガンではない	三
4	現在の日本訳が生れたのは	五
5	形式的な宣伝は盛んだが	七
6	ロータリー文献は難解というが	八
7	「真実」など探究できるか	九
8	「公平」とフェアは同じでない	十一

9	「みんな」という対象は広すぎる	十三
10	「好意を深める」とは？	十四
11	まず心正しからざれば	十五
12	四項目の試験ではない	十六
13	論語の「三省」ロータリーの「四省」	十七
14	フォアウェイとは四つ辻でもある	十八
15	会員諸君のお智恵を借りたい	十九

フォアウエイ・テストの

日本語訳は正しいか

RI第三六六地区
バスターガバナリー

塚 本 義 隆

(1) 大阪へ来た原作者テラー

大阪ロータリークラブの例会場には毎週かならず、クラブ旗と並んでフォアウエイテストの英字の旗が上がっているのをご覧になるでしょう。

昭和三十一年（一九五六）大阪中央公会堂で地区年次大会（当時第六十三区）が開かれた時、ハーバート・テラーさんが臨席しました。彼はその前年度の国際ロータリー会長でありましたが、わがクラブのバナーにフォアウエイ・テストの成句が英語で掲げているのを見つけて上気嫌で申しました。「こ

れは世界で最初のことだ」と。テラーはフォアウェイ・テストの原作者なのです。

ロータリーの五十周年を迎えて、彼はその著作財産権を無償で国際ロータリーへ譲渡しました。昭和二十九年（一九五四）のことです。テラーは昭和二年（一九二七）シカゴクラブへ入会した長老ロータリアンで、一八九三年四月十八日ミシガン州生れ、本年満八十歳を越えたが、なお元気かくしゃくであります。

(2) もしテストが実践されていたら

近年ひどくなった環境汚損、不徳義な商取引、横領事件など、日本はどこかが狂っております。このような時世にこそロータリアンは範を垂れるべきだと思います。戦後わが経済高度成長の主役をつとめたのはロータリアンを責任者

とする企業が大半を占めたのではないか。その功績は高く大きく評価されるべきであります。だが功績の陰げには罪過も伏在しておりました。そのため今日、ロータリアンおよびロータリークラブに対する世間の眼はまことにきびしいものがあることを、私どもは看過してはなりません。

ここで考えるのです。六万人の日本のロータリアンが、もしフォアウェイ・テストを一人一人本当に心にとどめて活用実践しておったならば、今日の狂ったような日本は起らずに済んだのではあるまいか、起ったとしても軽症に押え得たのではないか、という気もいたします。

(3) 標語やスローガンでない

フォアウェイ・テストとはそもそも何でしょうか。それは商道德高揚のスローガンではない。標語でもありません。実は物差しなのです。行為に出る前に

正しい判断を下す、政策決定に先立って誤りのない道を選び出す、そのための尺度に利用されるものです。このように原作者が説明しています。

物差しは使いやすくないと実用に向きません。だから原文はわずか二十四文字の英語です。平易な単語を用いながら、しかも具体的に表現してあります。口調をよくしようとか、語呂を合わせようとかの意図はありません。

日本語になったこのテストは標語的、スローガンの表現になっており、そうするために大切な文字が抜かしてあります。また、不忠実、不適當と思われる訳語が使われています。

日本語でなく英語原文そのままを大阪ロータリークラブが例会場に掲げているのはこのような理由によるのです。

スローガンはとかく聞き流されやすい。物差しは実用的でなければならぬ。そして第一に正確を必要とする。こんな観点から、以下にフォアウェイ・テス

トの訳語について検討を進めたいと思います。

(4) 現在の日本訳が生れたのは

まず、日本訳の出来たいきさつから調べましょう。「ロータリー五十年史」によれば、戦後最初の R I 理事をつとめた東京の手島知健氏（ともたけ）が中心になって、昭和二十九年（一九五四）日本各地のクラブから和訳を募集して、その中から優秀なものを選び採用したのです。応募件数は七十余、この選者は当時の第六十区六十一区のロータリー五十周年記念委員会でありました。「ロータリーの友」の同年十一月号に手島氏は選択方針を次ぎのとおり明らかにしています。

一、簡単に分りやすいもの

一、疑問体のもの、反語を避け、又誓言的でないもの

一、ロータリアン以外の方、特に中学程度の若人にも難解でないもの
当選に決まった日本訳の原案は次ぎのとおりであったが、他の応募案中から
一部の用語を借りてきて現在のものにしたのであると説明しています。

(当 選 原 案)

四つの自省—言行はこれに照してから—

一、真実か、どうか

二、みんなに公平か

三、善意と友愛を深めるか

四、みんなのためになるかどうか

また、標題については、四つの自省、四つの判省、四つの反省、四つの自
戒、渡世四針、四つの道、四つの試問、四つのめやす、心だめし四則、四つの
基準的な考え方、判断する際に必要な四則、その他いろいろの案があったが、

これは反省でなく、事前の自問である点から矢張り一番多い案の「四つのテスト」がよかろうと考えた、と手島氏は述べておられます。

(5) 形式的な宣伝は盛んだが

日本語の定訳ができてから、日本のロータリー諸クラブはこの「四つのテスト」をいろいろの面で活用しはじめました。額縁に入れて応接室や職場に飾ったり、ポスターを作って学校に贈ったり、事務机の上に立てたり、文鎮に彫りこんだり、本の枝折りに利用したり、無料貸傘に大書したり、封筒、便箋の余白に印刷したり、中には碑にして広場や駅前に建てたりしたクラブさえ現われました。

これらは一応結構なことでありましょう。けれどもそれは標語化されスローガン化された結果でないでしょうか。これは創作者テーラーさんの意図とちが

います。前述のとおり、フォアウエイ・テストはあくまで物差しなのです。この大事な点が、明瞭でないままで、日本語に訳されたことに因があります。

今一つの大切な点は、尺度は絶体正確性が求められることとあります。R I 理事会はフォアウエイ・テストの複製を管理する方針として「言葉づかいにおいて原文と全く同一でなければならぬ」と手続要覧に明記しております。翻訳の場合においても同様の要求があるのは当然でしょう。

(6) ロータリー文献は難解というが

「国際ロータリーの文献は難解だ」「日本語になっていない」という悪評をしばしば耳にします。全く同感であります。しかし、これには註釈が必要です。定款とか綱領、また、標語や物差しは正確さが必要です。原文に忠実であらねばなりません。そのほかの一般文献はインフォメーションであり、理解を

求める部類のものですから、読み易くすることが第一です。

フォアウェイ・テストは前者に属します。「中学程度の若人に理解される」よりも、事業人が、ロータリオン自身が活用せねばならない性質のものであります。経営責任者は自分の机のガラス板の下に差し入れておいて、毎日、毎時、眺めてほしい、そして実践の役に立ててもらいたい。これが原作者の意図であります。

(7) 「真実」など探究できるか

説明が長くなりましたが、さて、フォアウェイ・テストの日本語の検討にかかりましょう。まず、原文をお読み下さい。

THE FOUR-WAY TEST

Of the things we think, say or do

1. Is it the TRUTH?
2. Is it FAIR to all concerned?
3. Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIPS?
4. Will it be BENEFICIAL to all concerned?

Copyright, 1946, Rotary International

「四つのテスト」という標題の日本語については後廻わしにして、内容から始めます。

第一に、「真実」ということばはいささか哲学めいた響きがあるために、「真実」を確かめよなどは至難なことだ、という批判を聞きます。the TRUTH は「うそ偽りはないか」「ほんとうのことか」と極めて平凡な質問だと思えます。仏教では「真実」とは絶体の真理を意味すると辞典にあります。一方では、「真実」は下世話でも使われる、「真実惚れたか惚れないか」と歌舞伎で

言うよ、と反論する向きもありますが、さあどうでしょうか。
手許に寄せられたいろいろの改案を拾うとこんなものです。

それはまことか

それは本当のことか

本当かどうか

それは事実か

それは正しいことか

うそ偽りは無いか

誤り偽りは無いか

ごまかしはないか

(8) 「公平」とフェアは同じでない

第二に、「公平」の文字ですが、これが原語の FAIR の意味するところを正しく伝えるかどうかが問題です。公平は FAIR の一部分ではあるが、FAIR そのものではないと思われます。

「公平」は、えこひいきのない、いずれにも片寄らないことであります。英語の impartial とか unbiased がこれに当るでしょう。FAIR はもう少し広い意味を持ちます。このテストでは、公明正大、正正堂堂、あるいは、清らかで正しい、という意味が強い。FAIR の反対語は foul (汚れのある、不純なという意味) であります。つまり、フェア・プレイ (正正堂堂の競技) フェア・トレード (公正な取引) のように用いられる FAIR であると思うのです。

「公平」という翻訳に激しく反対して「公正」とすべきだと主張した人に村田竹治郎君 (京都クラブ元会長) がいました。同君は昭和三十五年、当時の中野静夫第三六五地区ガバナー (大阪) を通じて東京のガバナー会議へ改訳の

提議を行なったが容れられなかった。私は当時、同地区の文献研究委員であったので、このいきさつを知っております。

(9) 「みんな」という対象は広すぎる

第三に、*to all concerned?* が簡単に「みんなに」と訳されて、肝心の *concerned* を抜いて訳されています。「かかわりのある、利害関係のある」を省略しては不忠実な翻訳であって、ただ「みんなに」でよいならば英語でも *to all* で事が足ります。

同じ *concerned* が第二句と第四句の両方に用いてあるが、これは大切なポイントです。「みんな」といえば不特定多数を指すことになって、対象者が漠然としており、物差し役目を果たすのに不十分であります。原作者はそれゆえ「かかわりのある」「利害関係のある」人々に限定して *FAIR* であるか、ま

た、BENEFICIAL であるか、判断しやすくしたのであります。

昭和三十四年（一九五九）十一月、国際ロータリーが、エバンストン中央事務局で印刷した日本訳には「関係者のすべてに」の字句をちゃんと挿入しています。

(10) 「好意を深める」とは？

第四に、build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIPS を「好意と友情を深めるか」と訳されています。「友情を深める」はわかるが、「好意を深める」という言葉はおかしくないでしょうか。build GOOD WILL は、自分の行為が善意の表われになっているか、と自分で確かめることです。そしてその結果が友情を深めることに繋がるだろうかと自問するのであります。

「好意」の普通の意味は親愛感の表現で、自ら発する GOOD WILL は「善

意」であり、また、相手方がこちらに対して持つ思いやりの心は「厚意」である、と考えます。

(11) まず心正しからざれば

第五に、テストの前文ですが、*Of the things we think, say or do* とあるのを「言行はこれに照してから」と訳されております。お気付きのように *think* の訳語が脱落しています。原作者テラーさんは、心の中の考えこそ第一番に大切であると解説しております。心の中の考えが正しければ、外に現われる言葉も行為も正しくなるというものです。邪心を持ちながらいくら、言葉、行為がrippばでもそれは偽善というもの。「言行はこれに照らしてから」という方が口調がよいからとて、大切な心の中で考えることを省いてしまっは原作者の主張を無視することになりましょう。

(12) 四項目の試験ではない

第六に、最後になりましたが、標題の「四つのテスト」の日本語がこれよいか、どうか研究しましょう。冒頭に述べたようにたくさんの翻訳案があります。一番多くの応募者が使った「四つのテスト」の言葉を採用したのでそうです。この文句はすでに二十年近くも日本の各ロータリークラブで用いられ、なじまれていますので、今更なせ異説を唱えるのかとお叱りを受けると思いません。

しかし今一度つぎの諸点を冷静に吟味したいのであります。

まず、日本語で四つのテストといえは四項目に対するテストと聞こえませんか。ところが、このテストは四項目のうち三つできれば七十五点もらえるのは違います。四項目全部に合格しなければパスしないのです。英語を見ても

FOUR TESTS とは言わないで、THE FOUR-WAY TEST といい、単数、単一のテストであります。しかもハイフンが FOUR と WAY を一語に繋いでいます。ということは、四とおりに亘る質問ではあるが、全部を一括しての検査なのです。

(13) 論語の「三省」とロータリーの「四省」

TEST は試験、検査、吟味であります。学校の試験も、物理の実験や宗教信仰者に対する踏み絵もテストであります。フォアウェイ・テストは、人生行路の途上で真偽、正邪、善悪を、日常みづから自問自答するためのものであります。しかし、これは何も新しい発想ではない。東洋では二千五百年の昔から「三省」ということばがあり、論語の中で孔子の弟子によって説かれております。ただ異なる点は、論語の「三省」は過去反省の形となっておるのに対し、

フォアウエイ・テストは将来起るべき事柄に対する「四省」であることです。いずれも「みづからかえりみる」こと、Self-examinationである点は両者共通であります。

(14) フォアウエイとは四つ辻でもある

ここで註釈を入りたい点があります。オックスフォード英辞典によれば **FOUR-WAY** なる語は「二路の交叉点または四路の出合う場所」と説明されています。いうなれば四つ辻です。そこで、四つ辻に辿りついた時に、右へ行くのが正しいか、あるいは左にすべきかと、一旦停止して進路を考えることであると、このフォアウエイ・テストを解釈することもできます。この解釈について一九七二年二月末原作者テーラーさんへ私が手紙を出して意見を求めたことがあります。すると、次ぎのような返事を同年四月六日付でくれました。いわ

く――
『フォアウェイ・テストの字句については多様の解釈があると思うが、自分はこれを聖書のことば “*test all things, hold fast to that which is good*” から採った。すべて物事は吟味して悪しきを捨て去り、善きを身に着けることが大切です。人間は心の中に思うことが行為となって外に現われるものです。」「四つ辻に来たとき、立ち止まって、どの道が正しく、どちらが間違った道であるかを考える」という貴君の解釈はりっぱな解釈 (*a good interpretation*) であります。』

(15) 会員諸君のお智恵を借りたい

以上をもって私の説明を終わります。左記の文献もこの際、もう一度読み返していただき、会員各位のご教示を乞い、かつ、お智恵を拝借したい。そして

現在にまさるりっぱな日本語のフォアウエイ・テストが出来ないであろうか、また、その結果として、このテストの実用が盛んになるようにできないものだろうか。これが筆者の唯一つの祈りであります。

左 記

「フォアウエイ・テストは前進する」(42ページ)

昭四七・二・大阪ロータリークラブ発行

「小話、フォアウエイ・テスト」(21ページ)

昭四八・二・大阪ロータリークラブ発行

「四つのテストの日本語をめぐって」の座談会記事

昭四八・十月号「ロータリーの友」(4～9ページ)

(おわり)

一九七四年一月発行
R I 第三六六地区

職業奉仕

